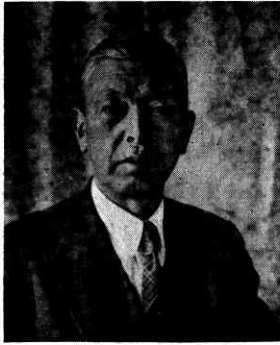


## 井口常雄先生を懐う

星 合 正 治



故井口常雄先生

われ等の井口先生が昭和 33 年 4 月 10 日に御発病、4 月 16 日、終に御他界になった。痛恨極りない。と同時に、先生との過去を省みると、真に感無量である。

当研究所の恒例の季末旅行が、本年は去る 3 月 17 日から 18 日にかけて、

清水、静岡地方への一泊旅行として行われた。先生も、いつもの通りに、これに御参加になって、御一緒したのが、数かずの楽しかった思い出の中での、そして今では悲しい、先生との最後の飲会であった。

あの時、先生は例の通り、始終、温かい笑顔で、楽し気に一同と行を共にせられたが、何とも忘れかねるのはその 17 日の晩、日本軽金属会社の興津寮での会食の時のことであった。先生、例の如く楽しそうに盃を挙げられる。身近かに先生のお顔を拝見すると、先生の眼は真赤だ。頬の辺りは前から血色のよい方であったが、細い血管が、一筋一筋、浮んで見える。その上、特に、はっとしたのは唇に紅く血が滲んでいるではないか、それとなしに、近頃のお身体の具合を伺い、今晚は早くお休みになるようにと、お勧めしたところ、「自分でも実は気が付いているのだが、何、君、もうかまわないことにしているのさ」と一向にさりげなくいわれる。

それでもかなり早目に休んでいただけたので、いささか安心して、同僚と歓談を続けていると、お休みになった筈の先生が、また出て来られて一座に仲間入りされた。困ったが仕方がない。そして、とうとう、一番遅いわれわれの組に、終りまでお付合になってしまったのであった。

爾来、その晩の先生のお姿が何ということなしに、頭にこびりついて、気になっていたところ、御発病との知らせである。さてはと、何とも形容のできない申し訳なさが、頭一ぱい、胸一ぱい。御永眠の 16 日まで、御病床の置かれた明治大学大学院の高い建物の前までは、お見舞にと、何度か足を運びながら、中に入ることがどうしてもできない。8 階のそれとおぼしい御病室のあたりを仰ぎつつ、少しでもお軽い方にと、ひそかに神かけてお祈り申上げる許りであった。

先生はおおらかな人格者であった。スポーツ・マン・シップを体得されたその道のリーダーであった。有名な酒豪であった。また反面、極めて細心、物事をよく考えて、慎重に事にのぞむ風の方でもあった。先生との長いお付合の過去を振り返ると、そうした、いろいろの節ぶしでの楽しい思い出は尽きるところを知らない。

研究活動の面での強い印象は、旧航空研究所で昭和 11

年に始めた軽合金板の抵抗溶接法に関する一連の研究であった。この研究は旧航研の電気部が主唱して、材料部、冶金部、飛行機部、工作部の協力を得て行った相当大勢りの総合研究であったが、長老である、故先生が気軽に率先して仲間に入って下さったことが、研究陣の纏まりをよくした有力なよすがとなった。この研究は、それから、いよいよ発展して、戦争中におよび、終には部外の人達も入れて、先生御自身に、直接、采配を振っていただくことになり、かなりの成果を残したと、ひそかに自負している。そして、この研究の特徴として総合研究の旨味がよく発揮された点でも、その後のことに、非常に良い参考になった。この研究の楽しかったこと、やり方の有意義であったことについては、先生御自身、晩年まで、事ある度にこれを例として引かれていたことでも知られる。

先生が細心の考慮の末の大きな断を下された例として、小生の心に一番強く残っているのは、昭和 20 年 8 月 15 日のあのときの事である。大詔を拝して、一同茫然自失のとき、学部長として壇に立たれた先生の第一声は、明 16 日の朝から、直ちに平時に復して勉学に専念しよう、というのであった。「戦に敗れて、今後のわれわれは如何なることか、今、何とも予想はつかない。しかし、はっきりいえることは、寸時でも時をかせいで、学問を身につけておくことである。身につけた学問だけは、如何なる敵といえども奪いさるわけにはゆくまい」というお話であった。そうだ！ その時のお声は低かったが、小生の耳には百雷の落ちるにも似て、頭のてっぺんから足の先まで、徹底的に打ちのめされた感じであった。先生にこうした強い断を下させた素因は、先生のスポーツで鍛えた強靱な精神にあったことと、秘かに感嘆している。

小生はいささか酒を嗜むので、その点で先生には特別にお気易く願えたことを、酒の有難みと感じているが、さりとて、小生のは到底先生程の豪酒ではない。その上、スポーツと来たら、何一つやれないけれど、酒の楽しみと合せて、自分に体験のないスポーツ精神の一端を少しは認識している積りである。それは一つに、先生と特に酒の上で、しばしば御一座願って、何かにつけて先生の考え方、物腰、態度等を親しく観察できたことによると思う。戦争前のある夏の夕べであった。銀座裏の柳の通りの道端に置かれた縁台に、浴衣姿の何だか見たことのあるような男が団扇で風を入れている。近づいて見るとそれは悠々閑々たる先生の寛ろいだ姿であった。その前の家が先生のお馴染みのおでん屋であった。

想えば先生には、実に長い間、公私ともに懇切な、という文字などでは、到底表わせない親身の御指導をいただいた。その先生は、すでにおおさぬ。悲しみか、むしろ淋しさといいたい。人生の淋しさを、今、身に染みてひしひしと感ずる。(33.5.8)